聖　書：マルコの福音書 11：27〜12：12
説教題：捨てた石、それが要の石
日　時：2026 年 3 月 1 日（朝拝）

イエス様が十字架にかかられる週の出来事を読んでいます。イエス様がエルサレムに入られたのは週の初めの日の日曜日でした。そして翌日の月曜日に、一般に「宮きよめ」と呼ばれる行動をイエス様は取られました。11 章 15〜18 節に記された通り、イエス様は宮の中で売り買いしている者たちを追い出し、両替人の台や鳩を売る者たちの腰掛けを倒されました。また、だれにも宮を通って物を運ぶことをお許しになりませんでした。今日の箇所はその翌日、火曜日のことです。イエス様が再びエルサレムに来て宮の中を歩いていると、祭司長・律法学者・長老たちがやって来ます。彼らはユダヤの最高法院サンヘドリンを構成する人々でした。前日の出来事は彼らにとって到底見過ごせるものではありませんでした。それは祭司長をはじめ、宮を管理する彼らの権威に対する明らかな挑戦と受け取れたからです。そこで彼らはイエス様を詰問します。「何の権威によってこれらのことをしているのか。誰があなたにこれらのことをする権威を授けたのか」と。我々はあなたにそのような権威を与えていない。なのにあなたは勝手なことをして秩序を乱している。それとも自分をメシアだと主張するか。それなら冒とく罪として罪に定めよう。そのような考えでいたのでしょう。

これに対してイエス様は逆に問われました。「わたしも一言尋ねましょう。それに答えなさい。そうしたら、何の権威によってこれらのことをしているのか、わたしも言いましょう。ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、それとも人から出たのですか。わたしに答えなさい。」　一見すると話題のすり替えのようにも思えるかもしれません。自分にとって都合の悪い質問をはぐらかすため、別の難しい質問を持って来たと。しかしそういうことではありません。イエス様のこの問いは彼らの質問と深く結びついています。ヨハネは荒野に現れて悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた人です。多くの人々が彼のところへ行って洗礼を受けました。イエス様もヨハネから洗礼を受けました。しかしそれはイエス様がヨハネより劣っていることを意味しません。ヨハネはイエス様についてこの福音書の 1 章 7 節で「私よりも力のある方が私の後に来られます。私には、かがんでその方の履き物のひもを解く資格もありません」と語りました。また「私はあなたがたに水でバプテスマを授けましたが、この方は聖霊によってバプテスマをお授けになります」とも言いました。ですからヨハネのバプテスマが

天から来たのか、それとも人から出たのか、正しく判断できれば、イエス様の権威がどこに由来するかも自ずと明らかになります。ヨハネをどう受け止めるかは、そのままイエス様をどう受け止めるかにつながっています。

しかしこの問いは祭司長たちにとって都合の悪いものでした。彼らは互いに論じ合います。「もし、天から来たと言えば、それならなぜ、ヨハネを信じなかったのかと言うだろう。だが、人から出たと言えば――。」　彼らはヨハネを信じず、ヨハネから洗礼を受けませんでした。ですから天から来たと答えるわけには行きません。一方、群衆はヨハネを神から遣わされた預言者だと信じていました。そんな民衆の前で「人から出た」と言えば、彼らの反発を招き、自分たちの立場も危うくなります。そこで彼らはイエス様に「分かりません」と答えます。知らないのではなく、答えたくないということです。真理に向き合おうとしない態度、心を閉ざした態度がそこにあります。そこでイエス様は言われました。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。」　何と見事な答えでしょうか。祭司長たちはイエス様から何か答えを引き出したい。何かしゃべらせれば、こちらの勝ちだ！と踏んでいました。しかし何も引き出すことができないまま終わります。罠を仕掛けたつもりが、かえって自分たちの頑なさをあらわにするだけでした。

もちろんイエス様は先に触れたように、問いをはぐらかされたわけではありません。30 節の言葉によって、ある意味で答えていました。彼らが正しく応答するなら権威の源は明らかになるはずでした。しかし心を閉ざしている人にどれほど言葉を重ねても意味はありません。イエス様は彼らの頑なさだけが浮き彫りにされるような受け答えをされたのです。

しかしでした。イエス様は「言いません」と言いつつ、続く 12 章で彼らにたとえ話を語られます。そしてこのたとえこそ、実は彼らの問いへの実質的な答えになっています。たとえに登場するぶどう園はイスラエルを象徴します。これは旧約聖書、たとえばイザヤ書 5 章 1～2 節などに見られる伝統的な比喩です。ぶどう園の主人は神。そして農夫たちはぶどう園の管理を任された民の指導者たちを指します。収穫の時に、主人は収穫の一部を受け取るためにしもべを遣わします。このしもべは神から遣わされた預言者などの神の器を指します。そのしもべに対して農夫たちはどうしたでしょうか。3 節に「彼らはそのしもべを捕らえて打ちたたき、何も持たせないで送り返し

た」とあります。そこで主人は再び別のしもべを遣わしますが、農夫たちはその頭を殴り、辱めました。また別のしもべを遣わしましたが、これを殺してしまったと続きます。どんどんエスカレートしています。主人はさらに多くのしもべを遣わしましたが、彼らは打ちたたいたり、殺したり、思いのまま振る舞いました。これはイスラエルの歴史そのものです。神は何度もしもべたちを送り、語りかけられました。ここに驚くべき神のあわれみと忍耐が示されています。一度拒まれてからと言って直ちに滅ぼすのではなく、彼らの悔い改めを願って何度も機会を与えられました。

ところが彼らはことごとく拒絶します。そこで主人は最後に愛する一人息子を遣わされます。「私の息子なら、敬ってくれるだろう。当然そのようにして然るべきだ」と考えて。この神の愛する一人子とはイエス様です。このたとえの中心に立つお方です。そしてここに「何の権威によってこれらのことをしているのか」との祭司長たちの問いに対する答えがあります。イエス様は天から来られた方、しかも神の愛する一人子であられます。しかし農夫たち、すなわちイスラエルの指導者たちは受け入れません。彼らは一層鼻息を荒くして、この最後のしもべに襲いかかります。「あれは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は自分たちのものになる。」　果たしてそんなことが本当に可能なのでしょうか。彼らはこう考えたのかもしれません。主人はこれまで何もして来なかった。きっと高齢で何もできないのだろう。だからあの息子を殺せば、ぶどう園は自分たちのものになる。こうして彼らは息子を捕らえて殺し、ぶどう園の外に投げ捨てました。これはまさに彼らがイエス様に対してしようとしていることです。すでに 11 章 18 節に、宮きよめの後、「祭司長たちや律法学者たちは、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した」と記されていました。そして彼らはこの後、実際にイエス様を十字架にかけて殺します。イエス様は彼らの心の中の思いを、すでにこうして言い当てておられたのです。

しかしこれで話は終わりではないというのが、このたとえのポイントです。農夫たちは主人の息子を殺して、「これで安心だ！恐れるものはもはや何もない。ついに我々が思い通りに生きることのできる時が来た！」と喜んだでしょう。しかし物語はここで終わりません。イエス様は 9 節で「ぶどう園の主人はどうするでしょうか」と問います。ここに二つのことが記されます。まず一つは主人はやって来て、農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるということです。農夫たちは「主人はもう来ない。もはや力がなくて、何もできないのだろう」と高をくくっていました。しかし主

人がこれまで実力行使しなかったのは力がないからではなく、愛と憐みのゆえでした。忍耐と寛容のゆえでした。しかしいつまでもそれを退けるなら、あわれみの時は終わりとなります。ついには主人自身が来るのです。つまり神は弱い方ではない。ついに来て正当なさばきを下すのです。そしてぶどう園は他の人たちに与えられる――これは神の国を託される使徒たち、またそれを受け継ぐ人たちを指しているのでしょう。

神がなさるもう一つのことは、10～11 節に引用されている詩篇 118 篇の御言葉と関係します。ここに出て来る「家を建てる者たちが捨てた石」とはイエス様のことです。当時の民のリーダーたちは、イエス様という石は役に立たないと判断して捨てました。それが「要の石」となったと言われています。これはどういう意味でしょうか。民の指導者たちはイエス様などいらないと言って、イエス様を捨てます。すなわち十字架にかけて殺します。しかしまさにその出来事を通してイエス様は私たちの救いに不可欠なお方となられたということです。罪ある私たちはそのままでは救われません。私たちの救いのためには、私たちの罪が神の御前に赦されるための贖いの代価が支払われる必要があります。イエス様はまさにその代価を十字架の死を通して払ってくださるのです。そのようにして要の石となってくださるのです。

11 節にはこうあります。「これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。」　何と聖書は、イエス様がこうして人々に捨てられ、そのことを経て要の石となることは、神が主権的に行われたみわざだったと言うのです。人々は自分の思いでイエス様を拒み、十字架につけます。しかしそれは神によって予定外のことではなく、むしろ私たちの救いを達成のために神が主権をもって導かれたことだったというのです。この神の主権と人間の責任の絶妙な組み合わせは使徒の働き 2 章 23 節で次のように述べられています。「神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺したのです。」　あるいは使徒の働き 4 章 27～28 節でも次のように述べられています。「事実、ヘロデとポンティオ・ピラトは、異邦人たちやイスラエルの民とともに、あなたが油を注がれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、あなたの御手とご計画によって、起こるように前もって定められていたことすべてを行いました。」私たちはこのような御言葉に接して、神が人々にイエス様を殺させたと言ってはいけません。彼らは誰からも強制されることなく、自らの意思と、自らの悪い心で、イエス様を殺しました。ですからその責任はただ彼らにあります。にもかかわらず、神は

人間の悪の行為さえも用いて、ご自身がかねてから立てておられた計画を実現されたというのです。これは確かに「私たちの目には不思議なこと」です。ただただ驚くべきことです。私たちはこの神の知恵と力に驚嘆し、ただ神をあがめるほかありません。

祭司長たちはこのたとえが自分たちを指していることに気づきました。まさに図星でした。しかし悔い改めるどころか、彼らは益々イエス様を捕らえようとします。しかし群衆を恐れて、この場では手を出せませんでした。こうして彼らは一層頑なな道を進んで行きます。

今日の御言葉の前に私たちはどのように導かれるべきでしょうか。まず心に留めたいことは、イエス様は神が遣わされた最後の使者、しかも神の愛する一人子であられること、従ってこの方にこそ私たちは聞き従う者でなければならないということです。神は歴史の中で、憐れみと忍耐をもって、しもべたちを遣わし続けて来られましたが、ついに愛する御子を遣わされました。世はこの御子を退けることができます。拒絶し、除き去って、「今や我々は自由だ！神は何もされないし、何もできない。我々が主だ！」と思うかもしれません。しかしそうではないというのが今日のたとえのポイントでした。今、勝っているようでも、そのままではないのです。主人は来るのです！愛する一人子を退けたら、もうあわれみはありません。その先にあるのはさばきのみです。ですから私たちはこの御子に聞くべきです。この御子において神の愛、真理、また知恵が示されています。頑なにこの方を退けるのではなく、この方を見つめ、その言葉に良く耳を傾け、この方において差し出されている神の救いと恵みにあずかる者へ導かれたいと思います。

そして特にイエス様が十字架の死を通して「要の石」となってくださったことを覚えたいと思います。イエス様は今日のたとえにおいても、ご自身が殺され、捨てられることについて予告されました。そのことを知りながらも、なお先へと進み、詩篇 118 篇が語っていた通り、捨てられた石となられます。しかしそのことを通して私たちの救いに不可欠な要の石となってくださいます。この方においてこそ罪の赦しがあり、神との和解があり、真の平和があり、あらゆる救いの祝福があります。ですからこのイエス様のところに来て、つながるようにと、ペテロの手紙第一 2 章 4〜6 節は次のように語ります。「主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが神には選ばれた、尊い生ける石です。あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜

ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。聖書にこう書いてあるからです。『見よ、わたしはシオンに、選ばれた石、尊い要石を据える。この方に信頼する者は決して失望させられることがない。』」　要の石であるイエス様のもとに来る者は、その者自身、霊の家に築き上げられます。つまり私たち自身、神の神殿となるのです。神の臨在と祝福が豊かに宿る場所とされるのです。その神殿、神の家はまだ完成に至っていないため、その素晴らしさは良く見えないかもしれません。人々はこれを軽んじ、なお嘲るかもしれません。しかしこの尊い要石なる方に信頼する者は決して失望させられることはないとありました。神ご自身がこの石を据えられたのです。ここに教会の確実な保証があります。どんな中を通ることがあっても、この要石のゆえに、神の建物は必ず建ち、完成に至ります。私たちはこの要の石につながり、この方において罪の赦しを受け、神の家として築き上げられて行く者たちでありたい。そしてこの世にあっても「これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ」と賛美しつつ、やがての完成の日には一層、「これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ」と主を賛美し、主に栄光を帰す、主の教会の光栄と喜びに生かされる者たちでありたいと願います。